

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成24年3月16日

農林水産省

埼玉県

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」、「彩のかがやき」、「キヌヒカリ」を中心とした品種構成であるが、近年、収量水準の高い「朝の光」が減少する一方、収量水準のやや低い「コシヒカリ」、「彩のみのり」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質・食味向上のための栽培管理技術の徹底並びに栽培基準や栽培指針に準じた肥培管理等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

収量構成要素をみると、近年、1㎡当たり株数及び全もみ数が減少傾向にある。
また、東部地帯のコシヒカリを中心とする早場栽培においては、収穫期が早くなり、登熟日数が短縮される傾向にある。

<最近の作柄（平成17年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
17	×	○	—	100
18	×	—	××	94
19	×	×	×	96
20	×	○	—	99
21	×	○	○	101
22	××	×	××	86
23	—	×	×	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

1㎡当たり株数が減少していることから、もみ数が減少し、さらには、登熟期間の短縮により、補償作用が十分に発揮されず、収量は低下傾向にある。

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
コシヒカリ	480	35.9	36.9	36.4	36.4	38.4	37.2
彩のかがやき	521	19.0	25.0	28.3	29.7	29.8	29.3
キヌヒカリ	460	18.7	18.8	18.5	17.7	18.0	18.0
朝の光	548	7.2	7.2	5.4	4.9	1.5	—
彩のみのり	515	—	—	—	0.8	3.0	4.0
その他	510	19.2	12.1	11.4	10.5	9.3	11.5
単収試算値の対前年差(kg)		0.4 -1.9 -0.2					

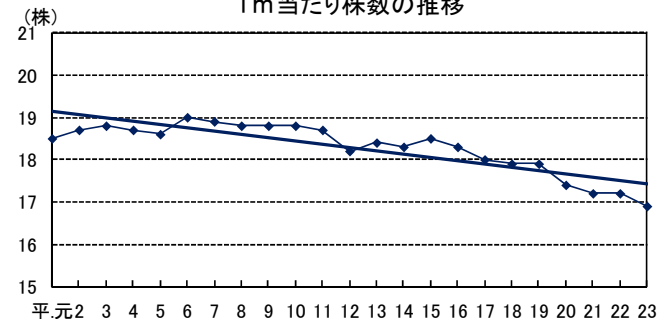
※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成24年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地域別作付面積割合の動向>

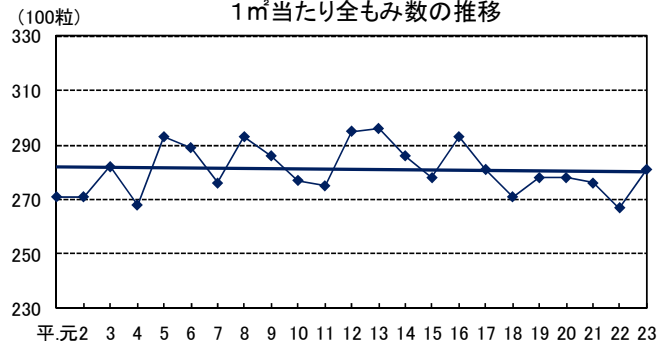
作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
東部	506	66.1	66.1	66.0	65.7	65.6	65.6
西部	462	33.9	33.9	34.0	34.3	34.4	34.4
単収試算値の対前年差(kg)		-0.1 0.0 0.0					

※ 平成24年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

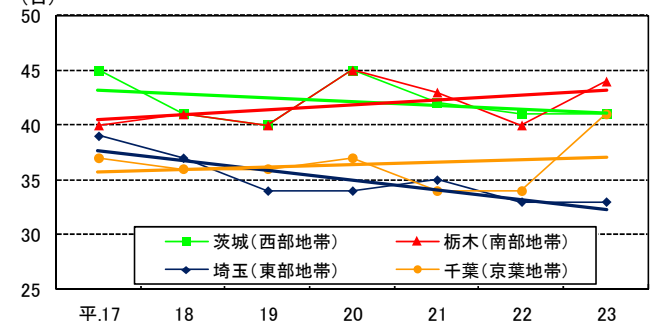
1㎡当たり株数の推移



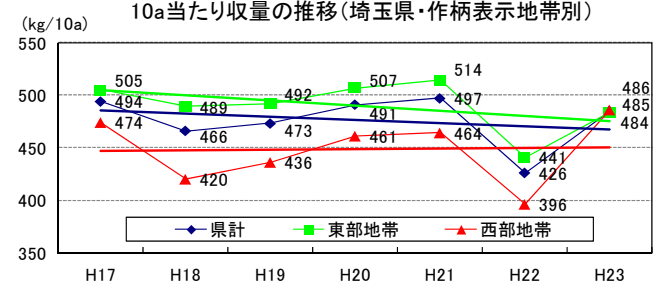
1㎡当たり全もみ数の推移



埼玉県東部地帯及び近隣3地帯の登熟日数の推移



10a当たり収量の推移(埼玉県・作柄表示地帯別)



富 山 県

1 品種構成の動向

「コシヒカリ」を中心とする品種構成であるが、近年、収量水準が高い「てんこもり」が増加する傾向にある。

また、「コシヒカリ」において、近年、収量が上昇傾向にある。

2 栽培技術等の動向

土壌診断に基づく土作り、高温登熟を回避するため、「コシヒカリ」の適期田植えの実施、適期・適切な中干しの徹底、穂肥の適期・適量施肥等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の平均気温が横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数及び登熟（千もみ当たり収量）とも、おおむね安定している。

<最近の作柄（平成17年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
17	—	○	◎	101
18	—	○	◎	102
19	×	—	×	97
20	○	—	◎	103
21	○	×	○	100
22	—	×	○	101
23	○	—	◎	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み
 ×：やや多い ××：多い

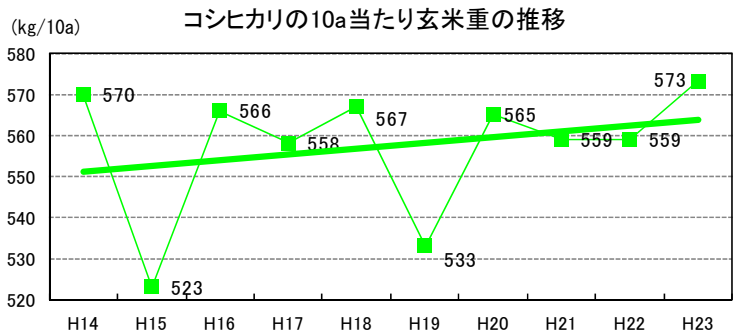
4 収量水準の動向

収量水準の高い「てんこもり」の作付割合が上昇していることに加え、近年、「コシヒカリ」の収量が上昇傾向にあることから収量水準は上昇している。

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
コシヒカリ	545	81.5	80.8	82.0	82.3	82.0	82.0
てんたかく	534	10.9	10.8	9.4	9.3	9.6	9.5
てんこもり	587	—	1.7	2.3	2.3	3.0	3.3
五百万石	516	2.4	2.3	2.4	2.3	1.4	1.3
単収試算値の対前年差(kg)			0.8	0.4	0.0	0.5	0.2

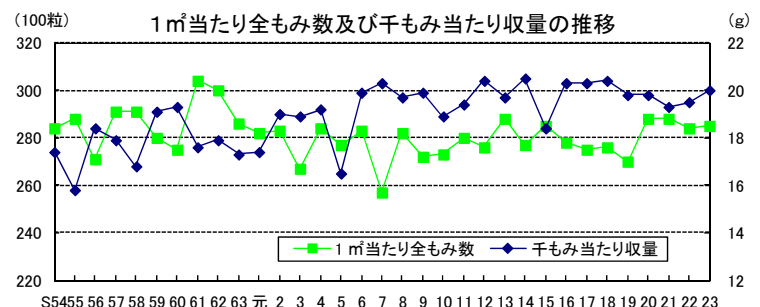
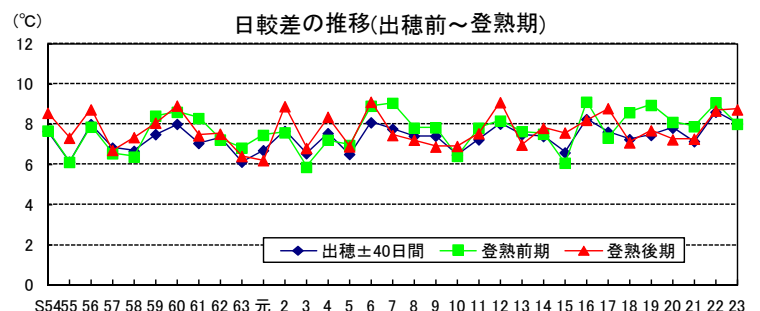
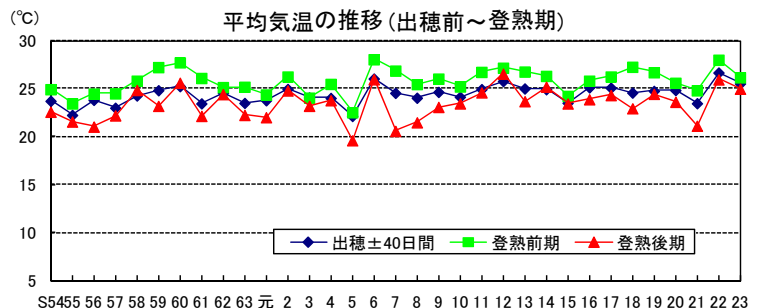
※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
 平成24年産見込は種子の予約数量から推計。
 単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。



<地域別作付面積割合の動向>

作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
東部	534	51.9	51.8	52.0	52.1	52.1	52.0
西部	537	48.1	48.2	48.0	47.9	47.9	48.0
単収試算値の対前年差(kg)			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

※ 平成24年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。



長 崎 県

1 品種構成の動向

主力品種の「ヒノヒカリ」への集中を回避するため、耐高温性で収量水準の高い「にこまる」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質に加え、食味に重点を置いた栽培指導（適切な肥培管理等）や、温暖化の進行に対応するための遅植えの指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟後期の最低気温が低下傾向にともない、日較差も上昇傾向にある。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

<最近の作柄（平成17年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
17	○	××	×	95
18	××	××	××	68
19	○	×	—	100
20	○	—	—	101
21	×	○	—	101
22	××	○	××	94
23	—	—	○	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「ヒノヒカリ」に比べ収量水準の高い「にこまる」の作付割合が上昇していることから収量水準は上昇している。

<品種別作付面積割合の動向>

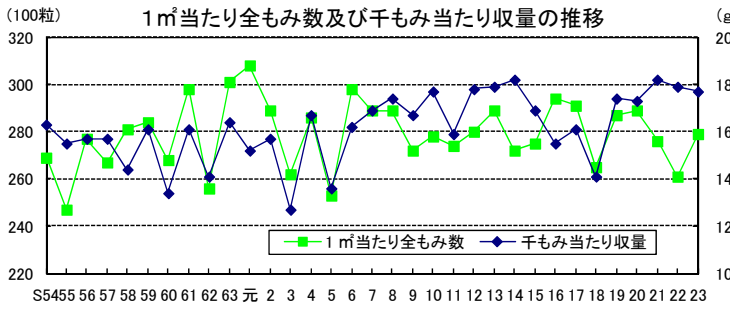
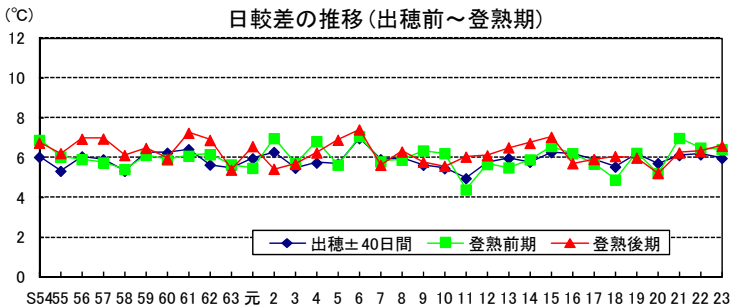
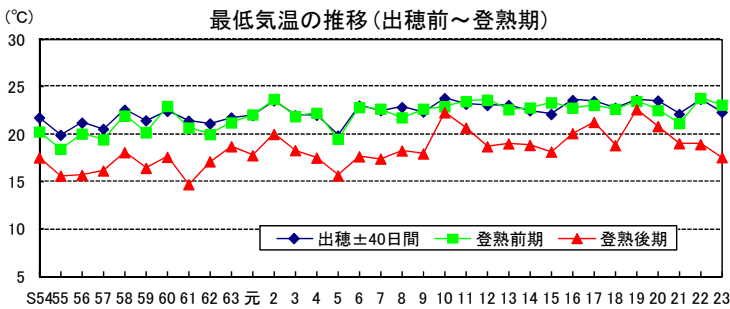
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
ヒノヒカリ	482	71.9	72.0	67.0	66.0	64.3	64.0
コシヒカリ	435	16.2	15.4	15.3	15.0	14.3	14.0
にこまる	543	3.1	5.4	9.6	12.7	16.1	16.5
単収試算値の対前年差(kg)					2.2	2.5	0.4

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成24年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地域別作付面積割合の動向>

地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
西彼	457	4.8	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9
東南部	474	39.7	39.7	39.9	39.9	40.4	40.4
県北	448	37.4	38.4	38.1	38.4	38.3	38.3
五島	393	6.4	5.5	5.6	5.3	5.1	5.1
壱岐・対馬	444	11.7	11.5	11.5	11.5	11.3	11.3
単収試算値の対前年差(kg)					0.2	0.2	0.0

※ 平成24年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。



鹿 児 島 県

1 品種構成の動向

台風等の災害からの危険分散を図るため、「ヒノヒカリ」や「コシヒカリ」が減少する一方、良食味で収量水準の高い「あきほなみ」や「イクヒカリ」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

高品質米の生産に向けて、適正な栽植密度の確保、適正な施肥、水管理等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の最低気温が横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

＜最近の作柄（平成17年産以降）＞

年次		全もみ数	登熟	被害	（作最況終指数）
17	早期	◎	×	○	105
	普通期	—	×	×	95
18	早期	—	—	—	99
	普通期	×	×	×	88
19	早期	—	×	×	68
	普通期	—	○	○	103
20	早期	×	◎	◎	106
	普通期	○	—	—	102
21	早期	—	◎	◎	106
	普通期	×	◎	○	102
22	早期	×	○	×	98
	普通期	×	◎	—	100
23	早期	×	◎	×	97
	普通期	×	◎	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い、××：多い

4 収量水準の動向

「ヒノヒカリ」に比べ収量水準の高い「あきほなみ」等の作付割合が上昇していることから収量水準は上昇している。

＜品種別作付面積割合の動向＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	20	21	22	23	24 (見込)
ヒノヒカリ	494	65.1	64.6	64.6	62.6	61.5	60.0
コシヒカリ	473	23.5	22.8	22.1	21.5	19.3	18.3
はなさつま	512	5.2	5.3	5.8	3.9	3.9	3.7
あきほなみ	538	—	—	0.8	3.4	6.6	8.7
イクヒカリ	506	—	—	1.0	1.9	3.3	4.3
単収試算値の対前年差(kg)					1.1	2.2	1.3

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成24年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

＜地域別作付面積割合の動向＞

地域名		(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
			H19	20	21	22	23	24 (見込)
早期	高収量地域	470	15.4	15.0	14.9	15.2	14.8	15.1
	低収量地域	409	9.5	8.8	8.6	8.6	8.2	7.9
普通期	高収量地域	512	26.0	26.5	26.8	26.8	27.1	27.1
	低収量地域	483	49.1	49.6	49.7	49.4	49.9	49.9
単収試算値の対前年差(kg)						0.0	0.4	0.2

※ 平成24年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

